

ものは記載に比べ、短い方への変異が見られる。

4. 薬の数と着く位置 薬が雄蕊の内側に着くこと、中央雄蕊にも常に薬を着ける点は完全に記載と一致している。ところが中央雄蕊の薬の様子については記載だけでは明らかでない。資料によると左右の薬よりやや高く、雄蕊の分岐部の高さに2個の薬がついている。大きさは左右の薬より僅かに小さい。

なお標本は牧野標本館に収めた。本稿を終るに当って標本の同定を賜わった松山庫三先生に深く感謝の意を表します。(長崎県壱岐郡郷浦町)

○イソツツジ小記 (原 寛) Hiroshi HARA: Notes on broad-leaved *Ledum* of the Far East

長い間日本列島のイソツツジ類に関心をもってきた私の気になっていたものに *Ledum hypoleucum* Komarov¹⁾ があった。今回レニングラード・コマロフ植物研究所の好意で原記載に引用された標本2枚を借観することができた。一枚は南ウスリー Ternei 湾 (Palczewsky, Sep. 8, 1906, fr.) 産、他は花期の樺太 (Augustinowicz) 産で詳しい地名は記されていない。どちらも葉下面にはきわめて短い白毛が一面に密生していて中肋上にだけ赤褐色の長毛が僅かにある。葉の毛の状態からは東北地方産のイソツツジとよく一致するが、花梗や子房にはイソツツジほど細毛がなく腺点が著るしい。

樺太ではカバフトイソツツジの型が普通で、その葉下面には白短毛が生えさらに赤褐色の長毛がかなり多いのがその基準形²⁾と考えられる。そしてその赤褐長毛がなくなった形が *L. hypoleucum* であり、他の諸性質では一致し区別が認められなかった。*L. hypoleucum* の形は樺太の敷香地区に見られ、今までイソツツジとして報告されている。

樺太や北海道の広葉系のイソツツジ類は、葉下面の赤褐長毛の多少によって、一面にあるものからほとんどないものまで順にチスマイソツツジ、カバフトイソツツジ、エゾイソツツジ、イソツツジと呼ばれる場合が多い。しかし私(1956)³⁾も述べたように、これらは多くの中間形によってつながりその間の境界線はいざれの場合もはっきりしてい

1) *Ledum hypoleucum* Komarov in Bull. Jard. Bot. Grand. **16**: 175 (1916); in Act. Hort. Petrop. **39**: 96 (1923)-Kuznetsov in Fl. Aziat. Ross. **9**: 80 (1916)-Kom. et K. Alisova, Key Far East. USSR. **2**: 836 (1932)-E. A. Busch in Fl. URSS **18**: 29 (1952)-Tolmatchev in Not. Syst. URSS. **15**: 202 (1953); Tr. Shr. Saghal. 150 (1956).

2) *Ledum palustre* var. *diversipilosum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo **31**: 102 (1917), emend. in Tr. & Shr. Jap. **1**: 14 (1922). Lectotype: Saghalin, Susuya (Nakahara, Jul. 5, 1906) in TI.

3) Hara in Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Bot. **6**: 351 (1956).

ない。時には葉下面に毛が全くなく淡緑色で腺点だけあるものがあるが、これは若い個体や勢の弱い枝に見られることは武田博士(1943)が指摘された通りである。樺太からミドリイソツツジ(*L. glandulosum* Nutt.)の名で記録されたものもこのような形で、北米産とは直接関係がない。

これらイソツツジ類は欧亜に分布する *L. palustre* L. より葉が広いことから、一時北米やグリーンランドに分布する *L. groenlandicum* Gunnerus (1766) にあてられたが、後者は5-8本の雄蕊をもち、葉の先は円く下面の褐綿毛は中肋まで完全におおいからし、花梗には細立毛が多く腺は目立たず、染色体は $2n=26$ であり、アジアには産しないものと考えられる。極東のイソツツジ類は雄蕊は10本、葉下面の中肋は毛が生えていてもはっきり見え、花梗には細毛と腺があり、これらの点では *L. palustre* の方に近く、またその染色体数も $2n=52$ (未発表) で *L. palustre* と一致する。したがって極東のイソツツジ類は *L. palustre* の広葉をもった地理的亜種と考えられ、その場合の学名は *subsp. diversipilosum* (Nakai) Hara (1956) である。

しかしもしイソツツジ類を独立種として扱う場合には *L. hypoleucum* Komarov (1916) が正名となる。近年(1953)カバフトイソツツジやエゾイソツツジ型のものに *L. macrophyllum* Tolmatchev、またイソツツジ型に *L. nipponicum* の種名があたえられたが、これらは明らかに *L. hypoleucum* と同一種中の変異と思われる。Tolmatchevは *L. groenlandicum* (*L. latifolium* Aiton を用いている)、*L. macrophyllum*、*L. nipponicum* を ser. *Latifolia* Tolm. にいれ、*L. hypoleucum* を別の ser. *Hypoleuca* として分類しているがこれには賛成できない。

ここにもう一つ問題になるのはアラスカ南端 Sitka から記載された *L. pacificum* Small (1914) で、雄蕊も10本と書かれ、分布に日本が引用され、Rehder (1940 & 49) はイソツツジ系の異名としているが、Hultén (1948)によればこれは *L. groenlandicum* と同一であるという。

□ Eric Hultén: **The circumpolar plants, 1.** Kungl. Svensk. Vetens.-Akad. Handl. Fjärd Ser. 8 (5): 275 pp., 228 maps. 1962 著者が多年にわたって手がけた北半球を中心に分布する高等植物について、北極を中心に北回帰線まではいった基地図の上に、1種ごとにその産地を示したものである。1集にはシダ植物・裸子植物・単子葉植物228種がふくまれ、彼独自の分布型によって分けて配列してある。種の範囲は大きくとられ、まれには属として1図にまとめてある。広分布種もふくまれエノコログサのような雑草的なものまでいれてある。日本というようなせまい地域だけを見ると不十分な点も見られるが、全世界にわたってこのような分布図を作ることは実に大変な仕事で、Hultén博士のような多年の経験と絶大な精力をもつ人でなくてはとうていできない労大作である。植物地理学上の重要な資料として今後長く役立つことと思う。

(原 寛)